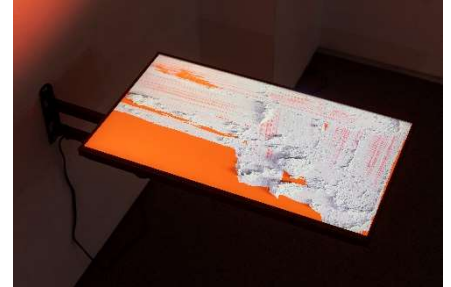


ACT (Artists Contemporary TOKAS) Vol. 6

メニスル

2024年2月24日(土)～3月24日(日)

トーキョーアーツアンドスペース本郷



私たちが見ているものは…？

インターネットの普及により、私たちは日々膨大なイメージを目から取り込んでいます。展覧会を訪れる前に、誰かの SNS で作品を見たり、その場に行ったような気分になったりした経験のある人も少なくないでしょう。オンラインでの鑑賞機会が増え、必ずしも実際に作品を見るべきだとは言えない時代になってきていますが、依然として、画面越しでは伝わりきれない作品の魅力があるのも事実です。

本展では、作品と対峙することで、その技法や構造の違和に気づきをもたらすような、認知の構造を視覚的に表現する3組のアーティスト、**大庭孝文**、**菅雄嗣**、**ヨフ**（大原崇嘉、古澤龍、柳川智之）の作品を紹介します。

「ACT (Artists Contemporary TOKAS)」とは：

トーキョーアーツアンドスペース (TOKAS) のプログラム参加経験者を含め、今注目すべき活動を行う作家を紹介する企画展です。

■ 展覧会概要

展覧会名：ACT Vol.6「メニスル」

会期：2024年2月24日(土)～3月24日(日)

会場：トーキョーアーツアンドスペース本郷（東京都文京区本郷2-4-16）

開館時間：11:00 - 19:00（最終入場は30分前まで）

休館日：月曜日

入場料：無料

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 トーキョーアーツアンドスペース

参加作家：大庭孝文、菅雄嗣、ヨフ（大原崇嘉、古澤龍、柳川智之）

ウェブサイト：www.tokyoartsandspace.jp/

■ 関連イベント

アーティスト・トーク 日時：3月2日(土) 16:00 - 17:30

< お問い合わせ >

〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1 東京都現代美術館内

トーキョーアーツアンドスペース（公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館） 広報担当：舟橋、市川

TEL: 03-5245-1142 / FAX: 03-5245-1154 / E-mail: press@tokyoartsandspace.jp

■ 展覧会について

本展では、認知の構造を視覚的に捉えようと試みるアーティスト3組を紹介します。大庭孝文は、人間の記憶について着目し、写真をもとに絵画を制作しています。異なる複数の方法で「描く」と「消す」を繰り返し行い、その痕跡が層となって現れます。菅雄嗣は、ウレタン塗装で鏡面のように施した画面に絵具を均一にのせた後、一部の絵具を刮ぐようにして描いたり、その削り取った絵具で対になる作品を描いたり、筆致の身体性や絵具そのものの物質感が放つ絵画性を探究しています。ヨフは、大原崇嘉、古澤龍、柳川智之の3人によるアーティスト・コレクティブです。視覚メディアにおける色彩、空間などの研究や実践をとおり、特殊な照明や空間構成の相互作用により、色の現出をコントロールし、新たな視覚体験を生み出しています。

彼らの作品は、実物へのつぶさな観察によって、細やかな凹凸やテクスチャが楽しめる表層や構造への理解を深め、また、展示空間内における作品と鑑賞者自身との距離の変化や視線の移動によって、さまざまな気づきを与えます。身体を使いながら時間をかけて作品と対峙することで、「モノを見て、何かを想起する」という行為自体を考え直すきっかけとなることでしょう。

本展のタイトル「メニスル」は、一見記号化された文字列のようですが、脳がその音を認識すると「目にする」という単語となり、同時に「実際に見る」というその意味自体も飛び込んできます。知覚から認識に変化するタイミングや記憶の仕方、他の事象との結び付け方は人さまざまですが、そのプロセスの差異こそが、この多様な世界を作り出しているのでしょう。3組それぞれの探究、そして新たな表現に挑戦した展示空間をぜひ会場でお楽しみください。

■ 参加作家／広報用画像

※この他にも広報用画像を用意しております。詳しくは広報担当までお問い合わせください。

大庭孝文

OHBA Takafumi

記憶と忘却という、人間の認知構造について探求し、平面作品に落とし込む作業を行う大庭。一見単純な構造に見える大庭の平面作品は、複層的な工程を経て制作されています。一枚の写真をもとに、輪郭を大まかにトレースしたのち、日本画の技巧を用いて岩絵具を塗り重ね、そこに水を含ませた刷毛でなぞり取ることで、溶けだした顔料が濃淡を作り出します。そこに薄紙を貼り重ね、透けて見える輪郭をさらにかたどり、立体的なパーツを制作します。ここで、大庭は元の画像に再び焦点を当て、同じような状況の異なる写真を参照します。これらの写真を参考にしながら、部分的な描写を意図的に画面に配置することで、平面作品が写真からの単なる模写ではなく、そこにある記憶の痕跡を大庭の視点を再通過した風景として立ち上がらせます。淡い表面に部分的に施されたプラチナやアルミニウムにより、平面は異なる光を放ちます。

これまで、大庭は自身にとっての「正しい風景」に焦点を当ててきました。本展では、実在しない記憶を実際に体験したと思込む「過誤記憶」や、他者の記憶が自分のものになったかのように感じる「記憶の流用」に主眼を置き、新しいアプローチをもって制作に取り組んでいます。知人が所有する何気ない写真や、互いに共有しているであろう時代性をもった記憶を、相手との対話を経ながら手繰り寄せ、新しい風景を描きだします。

プロフィール

1988年大阪府生まれ。広島県を拠点に活動。2018年広島市立大学大学院博士後期課程単位取得退学。主な展覧会に「日々の光景」(Cafe and Gallery 鐘や - K gallery、島根、2022)、「ある家の虚偽記憶」(GALLERY RYO、東京、2022)、「re」(biscuit gallery、東京、2022)、「WHAT is Art?」(WHAT CAFÉ、東京、2021)、「符号化された景色」(ラピスギャラリー、広島、2020)、「新進芸術家選抜展 FAUSS」(3331 Arts Chiyoda、東京、2018)など。主な受賞歴に「第72回 山口県美術展覧会」(2019)で優秀賞など。



(部分)

1. 《正しい風景（犬が雷を怖がっている）》2023

プラチナ、アルミニウム、アクリル絵具、岩絵具、膠、合成接着剤、スチレンペーパー、和紙、木製パネル

菅 雄嗣

SUGA Yushi

TWS-Emerging 2015 参加

菅は、図像の鮮明さ以上に、筆致の身体性や絵具そのものの物質感が放つ絵画性を探究しています。近年は、同一あるいは相互関係のある異なるモチーフの作品を2枚1組として並べ、対比させる展示スタイルをとっており、その描画手法も菅の作品を特徴づけています。まず片方の画面全体をウレタン塗装で鏡面のように施し、その上に単色の絵具を均一にのせ、乾く前にそこから刮ぐように描きます。さらに、その削り取った絵具を用いて、もう一方の作品を描くことで、対の効果を強調させています。モチーフとして3DCGで制作した架空のリミナル・スペースや、人のいない風景を選び、また、絵具を削り取ることで現れる艶のあるストロークや、透けて見える下地の冷たい輝きが、不確かな世界での緊張や空虚を醸し出します。

本展では、境界を意味する「liminal（リミナル）」をテーマに、絵画作品と普段制作のモチーフとしてCGモデルを展示構成に加え、菅として初めてのインスタレーションを発表します。現実と虚構の空間、そして、異なる手法によって描かれ対の関係を持った絵画作品シリーズは、どちらの境界も分断されることなく、繋がっており、メディアを往来する新たな表現となって立ち現れます。

プロフィール

1988年長崎県生まれ。茨城県を拠点に活動。2017年東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻修了。主な展覧会に「liminal」（MAHO KUBOTA GALLERY、東京、2023）、「SUMMER SHOW」（MAHO KUBOTA GALLERY、東京、2022）、「Day dream」（ISETAN SALONE、東京、2022）、「Mind Sights」（MAHO KUBOTA GALLERY、東京、2021）、「Scraped painting」（WHITESPACE ONE、福岡、2017）、「Spring fever」（駒込倉庫、東京、2017）など。主な受賞歴に「第4回CAF賞」（2017）で齋藤精一賞など。



2. 《room of sky #1》2023

木製パネルにウレタン塗装、油絵具

Photo: KEIZO KIOKU



3. 《Liminal paint #1》2023

木製パネルにウレタン塗装、油絵具

ヨフ

YOF

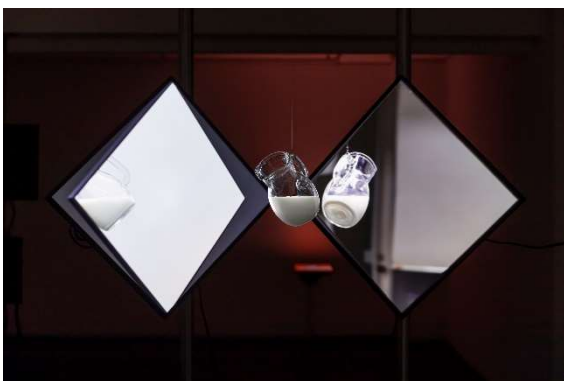
OPEN SITE 2019-2020 参加

大原崇嘉、古澤龍、柳川智之の3人によるアーティスト・コレクティブであるヨフは、色彩・空間についてのプラグマティック（実践的）なリサーチや、デジタルメディアにおけるイメージの拡張性について考察することで、視覚表現の現在性を捉え直す実践を行っています。2019年にTOKASの企画公募プログラム「OPEN SITE」の展示部門で発表したインスタレーション作品《2D Painting》では、テクスチャが削ぎ落された立体物とそれを照らし出す照明の作用によって、三次元空間の奥行きは消失し、二次元との認識を行き来するような体験をもたらしました。また、近年では、ディスプレイを用いて、鑑賞者の視線と映像空間との相互的な関わりをテーマとしたインスタレーション作品などを発表しています。

本展では、デジタルイメージにおいて唐突に「切り抜き／貼り付け」られた画像のように、対象と周囲の環境との視覚的な「断絶」を実空間において実現させることで、事物に内在する観念性について再考していきます。

プロフィール

2015年に結成。大原崇嘉：1986年生まれ。2012年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。古澤龍：1984年生まれ。東京藝術大学大学院映像研究科映像メディア学在籍。柳川智之：1985年生まれ。2013年情報科学芸術大学院大学[IAMAS]メディア表現研究科修了。主な展覧会に「いろところろ ～科学と美学が会える色彩学のありか」（東京造形大学附属美術館、2023）、「新しい空洞（うつほ） theca 2023ss 展」（theca、東京、2023）、「流れる窓、追い越す目」（art space kimura ASK?、東京、2023）、「令和4年度メディア芸術クリエイター育成支援事業成果プレゼンテーション『ENCOUNTERS』」（寺田倉庫 B&C HALL、東京、2023）、「Parailusion」（art space kimura ASK?、東京、2022）など。主な受賞歴に「令和4年度メディア芸術クリエイター育成支援事業」（2022）など。



4. 《Frames》2023

マルチチャンネル・ビデオ、ガラス瓶、ミルク

Photo: 稲口俊太



5. 《on Display (Paint)》2023

マルチチャンネル・ビデオ、ディスプレイ、スツール

Photo: 稲口俊太

「ACT (Artists Contemporary TOKAS) Vol. 6『メニスル』」
広報用画像申込書

Email: **press@tokyoartsandspace.jp**

Fax 番号: **03-5245-1154**

トーキョーアーツアンドスペース広報担当宛

(ご希望の広報用画像番号にチェックを入れてください)

1 2 3 4 5 ウェブバナー(1月上旬頃納品)

掲載媒体名(特集・コーナー名)

種別 TV ラジオ 新聞 フリーペーパー ネット媒体 その他()

掲載/放送予定日 月 日 発売/放送(月号)

貴社名

ご担当者名

Tel

Fax

E-mail(画像はメールでお送りしますので必ずご記入ください)

画像到着希望日 月 日 時頃までに送付

※ご記入いただいた個人情報は、お問い合わせ及びご要望に対応させていただく目的のみ利用させていただきます。

※お急ぎの場合はメールもしくは、お電話でお問い合わせください。

【注意事項】

※画像データは申請時の目的以外での使用はできません。ご掲載や放送以外の目的での写真のご利用はご遠慮ください。また、申請時とは別の媒体での使用、再販等の場合は改めて申請してください。

※画像データは、メールにてお送りします。お手元に届くまで1~2日(土日祝休み)ほど頂戴いたしますのでご了承ください。

※作品画像は全図でご使用いただき、トリミング、文字載せはお控えください。必ず所定のキャプション等を併記してください。

※提供した画像データは、使用后速やかに破棄してください。画像が無断で第三者に利用されることのないよう、Web サイトへのご掲載は、画像にコピーガードや転載不可の明記をしてください。

※情報確認のため、事前に記事原稿をお送りください。

※取材の内容が収録された番組等はビデオ・DVD を一部、印刷物(掲載誌・雑誌)については現物を1部もしくはコピーの場合は3部ご送付ください。Web サイトの場合は、掲載時に URL をお知らせください。

<お問い合わせ> ※校正ゲラ及び掲載誌紙・DVD 等は下記宛にお送りください。

〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1 東京都現代美術館内

トーキョーアーツアンドスペース(公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館)

広報担当: 舟橋、市川

TEL: 03-5245-1142 / FAX: 03-5245-1154 / E-mail: press@tokyoartsandspace.jp